様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月２５日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18720118
研究課題名（和文）　会話集による近代日本語の基礎的研究

研究課題名（英文）　Fundamental Study on Modern Japanese with the Conversation Books

研究代表者
櫻井　豪人（SAKURAI　TAKEHITO）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：60334009

研究成果の概要：

幕末から明治二十年までに編纂された日本語・西洋語対訳の会話集について、日本語史の資料として多くの研究者が利用できるよう整備することを目的に、当該資料を収集・整理・分類した。また、その代表的な資料であるアーネスト・サトウの"*Kuaiwa Hen*"（『会話篇』、明治六年刊）について、ローマ字で記された会話体日本語文を漢字仮名交じり文に直して翻字し、かつ、英文で記された注釈を翻訳することにより、同資料を日本語史の資料として一層利用しやすい形にした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	240,000	3,040,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：日本語史

１．研究開始当初の背景

幕末明治初期の西洋語対訳会話集は、当時の口語を反映しているという点で日本語史研究上極めて重要な資料である。口語（話し言葉）主体で書かれている資料の希少性・有用性は今更論じるまでもないが、明治の初めに滑稽本が廃れて以降、明治二十年代の言文一致文成立に至るまでの間の江戸語・東京語資料となると、これらの会話集以外には殆ど存在しないので、幕末から明治にかけて変化した口語日本語の実態はこれらの資料に拠らねば知りえない。にも拘らず、研究開始当初から今日に至るまでまだ資料として利用できる状態までに整備されているとは言い難い。よってこれらを整備し、多くの研究者が容易に利用できるよう整備して行くことが本研究の主な目的である。それゆえ、研究自体は極めて地味な基礎的研究であり、その結果に独創的な部分が生じるとは言い難いが、その反面、様々な日本語研究者に広くに還元されるという意義は少なくない。

例えば、現代でもよく使われる「すごい嬉しい」といった表現は、「すごく嬉しい」という表現の誤

用であるとする見方が一部の研究者の間に存在するが、アーネスト・サトウの*Kuaiwa Hen*（以下『会話篇』、明治六,1873 年刊）を調べると、「Osoroshii takai mon' da.（おそろしい高いもんだ）」や「Iya, tohômonai takai.（いや、途方もない高い）」などという用例が拾い出せる。（ただし、「すごい」の同様の用例は、現在のところ昭和以降のものしか知られていない。）無論、このような表現が実際にどの程度なされていたのかについて、他の資料の用例も参照しつつ検証し、その上でこれらの表現がどのような言語現象であるのかを考えて行かねばならないが、これらの用例を見れば「誤用」の一言で片付けるのは性急すぎるように思われる。その是非はさておくとしても、これらの資料に対する基礎的研究が立ち遅れていることは問題であった。

一口に「江戸語」と言っても、その内実は町人から武家まで様々な様相を呈していることが既に知られている。その上で、江戸語・東京語研究の先駆者の一人・松村明氏は著書『江戸語東京語の研究』の中で、『英蘭会話訳語』（明治元年刊）や上記アーネスト・サトウの『会話篇』などといった会話集についていち早く分析し、その中では決して「ヒ」と「シ」が交代しないことや［ai］という連母音が［e:］にならないことなどから、そこに記されている江戸語が「教養ある人々の言語相」であることを指摘し、さらにはそこに共通語としての「東京語」の萌芽が見られるとの卓見を示した。ただ残念なことに、そのような重要な資料がいまだに十分に整備されておらず、またその流れを汲む重要な資料群に至っては存在さえ十分に知られていないという状況にあった。

２．研究の目的

本研究の目的は、幕末から明治二十年までに編纂された日本語・西洋語対訳の会話集を、日本語史の資料として多くの研究者が利用できるよう整備することにある。そのために具体的に明らかにしたかった点は、①幕末から明治二十年までに刊行された会話集について、その全貌および系統関係を解明すること、②当該資料のそれぞれについて、近代日本語資料としての価値を判断すること、③当該資料の中から近代日本語研究に有用な資料を選び出し、多くの研究者が容易に利用できるよう整備して行くこと、の３点であった。その究極的な目的は、東京語成立史、ひいては共通語成立史を解明することにあるが、本研究はその基礎的研究を築くことを目的とした。

３．研究の方法

まず、各図書館に収蔵されている資料やマイクロフィルム等を利用し、対象となる会話集全てについて複写の収集を行なった。所蔵先は国立国会図書館が中心であり、同館所蔵の明治期刊行物の資料は現在 WEB ページ上の「近代デジタルライブラリー」で公開されているが、各会話集の原本となった英蘭対訳会話集などの洋書は、同館から直接複写を入手した。全ての対象資料の収集を終えた段階で各資料の系統関係について考察し、代表的な系統の資料については、各資料間での比較対照を行い、それぞれの資料の性格（編纂方法や訳文の付し方など）についての特徴を調査した。

次に、口語資料として特に有益なもの、具体的にはアーネスト・サトウの『会話篇』について、日本語史資料として扱いやすくするよう整備した。この資料の日本語は全てローマ字で記されていて読みにくいので、まずその本文の全てを漢字仮名交じり文に直した上で電子テキスト化した。（最終的には索引を作成する予定。）

それと同時に、英文で書かれた Part Ⅱ の翻訳を試みた。この作業は、研究代表者が個人で翻訳すると同時に、本務校における授業（演習）において、学生にも翻字・翻訳を課し、学生たちとの意見の交換を通じて記述内容の吟味を行なった。本研究の中心はあくまで資料研究を中心とした基礎的研究であるが、その先にあるのは無論、様々な日本語史についての応用的研究である。日本語研究を志す学生が、そのような応用的研究の端緒を得るという意味でも本研究は有効であり、各資料中に見られる個々の特殊な表現について、様々な地域の方言を身につけている学生たちのアイディアに耳を傾けることは、本研究の完成度を高める上でも重要な意味を持った。

４．研究成果

(1)幕末から明治十九年までに刊行された会話集の全貌を明らかにすべく、約 50 の会話集について調査を行ない、その影印・コピー等を収集した。

(2)上記の資料について、以下のような資料群に大別し、内容を検討した。

①オランダ語対訳の会話集
②蘭学系英会話集
③中国系英会話集
④欧米人による会話集
⑤外国会話集を底本とする会話集
- Bellenger : *New Guide to Modern Conversation* の系統の会話集
- Chouquet : *Easy Conversation in French* の系統の会話集
- Bartels : *The Modern Linguist or Conversation* の系統の会話集

⑥その他の系統、または系統不明の英会話集

(3)上記の資料に対する先行研究を集め、各資料における研究の現状を把握した。

(4)Bellenger 系統の会話集である村松守義『明治会話編』（明治十八～十九年刊）について、Bellenger の会話集以外の底本を発見し、その編纂方法を考える手がかりを得た。

(5)アーネスト・サトウ『会話篇』について、Part Ⅰのローマ字日本語表記の漢字仮名混じり文による翻字作業、及び Part Ⅱの英文翻訳作業を行ない、Part Ⅰの序文、Part Ⅱの全 25 章と巻末の動詞活用表を含めた全ての英文について翻訳作業を終了した。その際、単なる翻訳に終始せず、その中で記されている風俗・習慣・事物などについても辞書類を参照するなどして検証を行なった。加えて、冒頭からもう一度翻字と翻訳について見直し、訳語や書式の統一を図った。また、同資料について索引化作業を開始した。

(6)同資料に関する先行研究を集め、各資料における研究の現状を把握した。また、サトウの日記等、『会話篇』の編纂に関係する様々な資料を参照し、『会話篇』の記述との関連性について探った。

(7)同資料の中に出てくる参照資料（アストンの口語文典 *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language* 第 2 版 1871 年刊や同文語文典 *A Grammar of the Japanese Written Language* 初版 1872 年刊、ホフマンの日本文典 *A Japanese Grammar* など）についても資料を収集し、必要に応じてそれらの資料を参照しつつ、サトウの記述の典拠や妥当性について検証した。その結果、サトウの『会話篇』は特にアストンの口語文典および文語文典の文法体系の影響を強く受けていると同時に、独自の判断による文法範疇も見られることが確認された。

(8)『会話篇』Part Ⅱの英文翻訳の際に気づいた、サトウの日本語文法観や用語の特徴についてまとめた。例えばbase（語基）、root（語根）、participle（分詞）といった用語・概念は、アストンなどの先行学説に拠りながらもサトウ独自の考え方があり、しかも『会話篇』では必ずしも一カ所で詳述されているわけではない。従って、把握するにはやや困難が伴うが、全編を翻訳することによりその全体像が明らかになってきた。以下に、研究成果として知り得た、『会話篇』で用いられる特徴的な文法用語について、詳しく述べる。

<u>①品詞分類に関する用語</u>

・base…語基。学校文法でいう動詞の諸活用形をさす。ただし、連用形は語根（root）と呼ぶ。学校文法でいう動詞未然形は否定語基、仮定形は条件法語基。（終止・連体形は直説法現在形、命令形は命令法。）

・root…語根。大半は学校文法でいう動詞の連用形をさす。（ちなみに形容詞の連用形は「形容詞の副詞形（adverbial form）」と呼ぶ場合が多い。）一方、「形容詞語根（root of an adjective、adjective root）」という表現も時折見受けられ、その場合は「大き（い）」「小さ（い）」「短（い）」「柔らか（い）」「憎（い）」「良（い）」など、ほぼ学校文法でいう形容詞の語幹をさす。また、「少し」「すぐ」「確か」「いささか」といった、学校文法ではほぼ形容動詞と呼ぶような語の語幹も「形容詞語根」と呼んでいる。さらに、「かく」「斯様」の「か」や「さぞ」「さよう」の「さ」、「あ」などは、「指示詞語根（demonstrative root）」と呼んでいる。（第 4 章 3 番、第 8 章 6 番、第 9 章 6 番。）

・participle…分詞。大半は学校文法でいう動詞連用形+「て」（巻末の語形変化表ではこれを「副詞形（adverbial form）」と呼ぶ）のことをさす。しかし、「磨いたり」を「継続的な分詞の一種」としたり（第 5 章 7 番）、「行かずに」「なくて」「変わりませず」「ならず」「申しませんで」のようなものを「否定の分詞」としているので、正確には、学校文法でいうところの「用言を含んだ連用修飾語」の全般をさす。（ちなみに、形容詞「ない」は動詞として捉えている。第 1 章 14 番。）

・particle…「不変化詞」と訳せば全てを統一的に訳せるが、日本語を記述する場合にはあまり用いられない用語なので、大半は「助詞」と訳し、場合によっては「接頭辞」などと訳した。

・pronominal adjective…代名形容詞。「あの」「その」など、学校文法でいう連体詞の一部。第1章6番と第2章25番で出てくる用語。

・desiderative adjective…願望形容詞。「行きたい」「申したい」など、動詞に「たい」を付けた形をこう呼ぶ。ただ、第12章19番では「めでたい」も願望形容詞であるとしているが、その判断はやや穏当性を欠く。

・adverb…副詞。「連用形」と訳してもよい場合が多数あるが、活用形の一つとして捉えているのではなく、転成した別品詞として捉えているので、そのまま「副詞」と訳す。下記「副詞形」を参照。

・adverbial form…副詞形。主に学校文法でいう形容詞（もしくは形容詞型活用の助動詞）の連用形をさす。（第 3 章 21 番や第 8 章 6 番で、「喜ばしく」のようなものを形容詞の副詞形と呼ぶほか、第

10 章 5 番では「なるべく」の「べく」も、語根「べ」の副詞形と呼んでいる。）巻末の語形変化表の説明によれば、動詞連用形+「て」のことも「副詞形」と名付けたというが、本文中でそう呼んでいる例は無く、そのようなものは専ら「分詞」と呼んでいる。

・verbal form…動詞形。実際は、叙述用法として用いる形容詞のこと。第2章7番（実際には8番）に出てくる用語。また、第1章14番には「動詞として用いられる（USED AS A VERB）「ない」の活用」という表があるが、これは「動詞形」ではなく、「ない」を（例外的に）動詞であると捉えていることの表れであろう。

②省略・縮約・短縮に関する用語

・contraction…縮約（形）、縮約したもの。多くは音便化や母音脱落等の音変化によって変化した場合に用いる用語。例えば「おとっつぁん」は「おととさん」の縮約、「おんな」は「おみな」の縮約など。

・ellipsis / elliptical…省略。本来あるべき語句が省略されていることを示すが、単に語が省略されている場合のみならず、簡略化されていることも指す。例えば「帰るであろう」は「帰るものであろう」の省略、「ようこそ」は「ようこそいらっしゃいまし」の省略など。

・abbreviation…省略（形）。contraction のような音変化をさす場合と、ellipsis のような省略をさす場合がある。例えば「まあ」は「まず」の省略、「なん」は「なに」の省略、「くんな」の「な」は「なされ」の省略、「もう」は「もうはやたまらない」の省略など。

その他、少数ではあるが short（短縮形）、elide（省略）などといった用語も見られる。

③連体修飾に関する用語

・attribute…連体修飾語句。「不自由な」「感心な」「妙な」のような形容動詞連体形や、「どういう（意味）」「わけのわからない（こと）」「是非も無い（こと）」のような連体修飾句をさす。

・attributive form…連体形。

・generic…属性を表わす。

・generic particle…属性を表わす助詞。連体格助詞「の」や、形容動詞連体形語尾「な」のこと。

・possessive…所有を表わす、所有（の）。

・possessive particle…所有を表わす助詞。（古語の連体格助詞「が」、近代語の連体格助詞「の」に対して。第 1 章 19 番。）

・possessive case…所有格。

④その他、やや独特な用語

・correlative (with)…相関語。「申す」と「なさる」、「あげる」と「くれる」「もらう」など、相関関係にある語をさす。（英語ではeitherとorのようなものをcorrelative（相関語）と呼ぶ。）

・connect with…と関連する。「たか（高）」と「たけ（丈）」、「ぶっつけ」と「ぶちつけ」、「かすかに」と「霞」、「まさか」と「まさしく」のように、語源的に繋がっているものをこう表現している。

・force…意味、意味合い。働き。機能。文法的機能（いわゆる職能）を指している場合が多いが、そうでない場合もある。

なお、Part Ⅱの翻訳については、『茨城大学人文学部紀要　人文コミュニケーション学科論集』第 7 号（2009 年 9 月）以降に、「訳注稿」として連載する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①櫻井豪人「中村敬宇ゆかりの二つの英華字典の所在－前編：中村敬宇旧蔵S. W. Williams『英華韻府歴階』－」『日本英学史学会報』110、2-3、2006、査読有

②櫻井豪人「中村敬宇ゆかりの二つの英華字典の所在－後編：勝海舟旧蔵W. H. Medhurst英華字典－」『日本英学史学会報』111、5-6、2007、査読有

③櫻井豪人「翻訳語としての「文庫」と「写字台」　－絵入り単語集を利用した翻訳語研究の一例として－」『茨城大学人文学部紀要人文コミュニケーション学科論集』3、1-12、2007、査読無

④櫻井豪人「『英和対訳袖珍辞書』初版および改正増補版の草稿」『日本語の研究』3-4、86-93、2007、査読有

⑤櫻井豪人「アーネスト・サトウ『会話篇』Part Ⅱ訳注稿（1）」『茨城大学人文学部紀要人文コミュニケーション学科論集』7、2009、査読無

〔図書〕（計 1 件）

①櫻井豪人『三語便覧　初版本影印・索引・解説』港の人、664pp.、2009

６．研究組織

(1)研究代表者

櫻井　豪人（SAKURAI TAKEHITO）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：60334009

(2)研究分担者：なし

(3)連携研究者：なし